

圓塾便り

2014年
1月号
Vol.15

文化財への先入観

「コラム「文化の実相」第四弾」
仰ぎ見る大伽藍の佇まい、秘仏が醸し出す大円境地、名工の祈りを宿す美工芸品の数々―皆さんは多くの文化財をご覧になって、どんな想いにとられますか。

文化財鑑賞の視座

正の文化財・負の文化財

小遣い 田中久雄

面から、文化財に對峙するの

す。負であること自体が将来

にわたって、同じ愚行を許さないという本意を謳い上げています。悲惨の象徴である負の側面を強烈に投影することによって、我々の平和への願いをゆるぎないものにしていきます。

この文化遺産を再認識して、庶民レベルで伝えていくことが、この文化遺産を護る本質的なのではないのでしょうか。

文化財に社会を視る

力強さ、厳かさ、暖かさ、豊かさ、優しさ等の観念がひとつに凝縮した敬虔な神秘性に抱かれ、至福のひとつときに浸っておられるのでは。

例えば、貴族の御殿や雄々しい城郭の場合、当時の権力者の立場からすれば紛れもない正の文化財です。でも土木建築に苦役を強いられた庶民には負の文化財と映ります。

「和食」という文化遺産先だつて日本の和食が世界文化遺産に認定されました。和食の本来の姿を考えてみましょう。

文化財に鑑賞では、誰もが味わえる醍醐味のように思われますが、でもこれって事前にある種の期待感や先入観が摺り込まれているからかもしれない。「文化財」という暗黙の期待や思い込みが先走り、実物を目の当たりにするや条件反射的に「至福の喜び」を感じてしまっているのではないのでしょうか。

正の文化財・負の文化財
小生は敢えて、こうした先入観や期待感を排して、文化財自体が持つ正と負の二側

面から、文化財に對峙するのす。負であること自体が将来にわたって、同じ愚行を許さないという本意を謳い上げています。悲惨の象徴である負の側面を強烈に投影することによって、我々の平和への願いをゆるぎないものにしていきます。

「和食」という文化遺産先だつて日本の和食が世界文化遺産に認定されました。和食の本来の姿を考えてみましょう。

文化財に鑑賞では、誰もが味わえる醍醐味のように思われますが、でもこれって事前にある種の期待感や先入観が摺り込まれているからかもしれない。「文化財」という暗黙の期待や思い込みが先走り、実物を目の当たりにするや条件反射的に「至福の喜び」を感じてしまっているのではないのでしょうか。

正の文化財・負の文化財
小生は敢えて、こうした先入観や期待感を排して、文化財自体が持つ正と負の二側

面から、文化財に對峙するのす。負であること自体が将来にわたって、同じ愚行を許さないという本意を謳い上げています。悲惨の象徴である負の側面を強烈に投影することによって、我々の平和への願いをゆるぎないものにしていきます。

「和食」という文化遺産先だつて日本の和食が世界文化遺産に認定されました。和食の本来の姿を考えてみましょう。

文化財に鑑賞では、誰もが味わえる醍醐味のように思われますが、でもこれって事前にある種の期待感や先入観が摺り込まれているからかもしれない。「文化財」という暗黙の期待や思い込みが先走り、実物を目の当たりにするや条件反射的に「至福の喜び」を感じてしまっているのではないのでしょうか。

正の文化財・負の文化財
小生は敢えて、こうした先入観や期待感を排して、文化財自体が持つ正と負の二側

面から、文化財に對峙するのす。負であること自体が将来にわたって、同じ愚行を許さないという本意を謳い上げています。悲惨の象徴である負の側面を強烈に投影することによって、我々の平和への願いをゆるぎないものにしていきます。

「和食」という文化遺産先だつて日本の和食が世界文化遺産に認定されました。和食の本来の姿を考えてみましょう。

文化財に鑑賞では、誰もが味わえる醍醐味のように思われますが、でもこれって事前にある種の期待感や先入観が摺り込まれているからかもしれない。「文化財」という暗黙の期待や思い込みが先走り、実物を目の当たりにするや条件反射的に「至福の喜び」を感じてしまっているのではないのでしょうか。



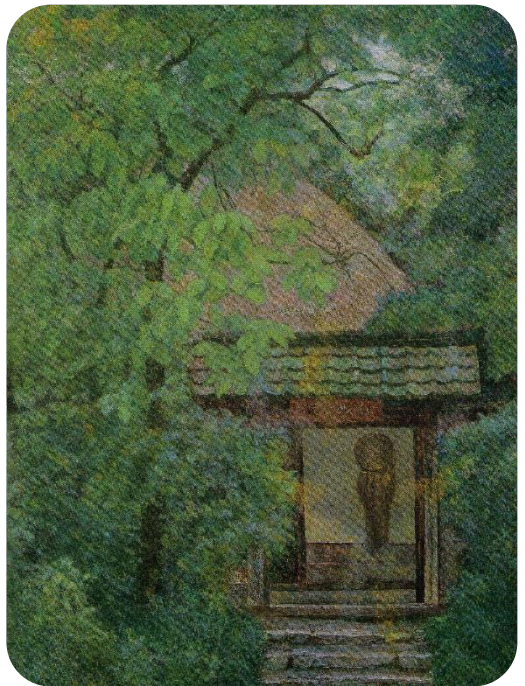
深海にいきる魚のように
自ら燃えなければ
どこにも光はない
明石海人

葉牡丹の仕合せ

新年あけましておめでと
うございます！
旧年中のご縁のすべてに感謝し、皆様の末永い仕合せを、心からお祈り申し上げます。

さて、お正月飾りに欠かせない葉牡丹。葉が幾重にも重なるその姿は、「仕合せ」を表わすそうです。本来の「仕合せ」とは、幸運だけでなく、禍福のすべて、運命の巡り合わせそのものを示したよう

です。
葉牡丹の花言葉は、「愛を包む」「慈愛」「物事に動じない」…。今年も葉牡丹の葉、一枚



洛外放浪譚

皆さまのご助言もあって、お陰様で二〇二四年度も、お楽しみな「圓塾さあくる講座」をご用意できましたヨ！
洛外といえども殆ど京都市内。すべて交通の便の良いたるところです。お楽しみは、今回はすべて体にやさしい和食の予定。

是非とも、お気軽にご参加下さいませ。本年もより多くの方々との文化浴で、円熟境地を放浪することができます。詳しくはチラシをご覧くださいね。

仏想観

頭目 澤野道玄

今まで多くの仏像の修理にたずさわってきた。やはり仏像は他のものの修理とくらべて、緊張感が違うのだ。人々の礼拝の対象物であるという理由だけではないのである。仕事に取り組み意気込みも違えば、修理方法も他のものと根本的な違いがある。仏像を造る人、仏像を修理する人を一般的には仏師（ぶっし）と称しているが、私は仏師ではない。あえて称するならば、仏様の尊厳を再生する仏工（ぶつく）である。

「尊厳を再生する」と、言葉では簡単に言えるのだが、なかなか難しいことなのである。仏像はあくまでも仏様の便宜な象徴であつて、本当の仏様は不可視な存在であるから、その見えない尊厳を具現化しなければいけないところが難しいのである。結局のところ、自分の人生で育まれ培われてきた仏想観のようなものを頼りに修理をしているのである。人々の苦悩を救済される慈悲。他方、人間の深い煩悩を凝視される知恵。このような様々な仏様の御徳を仏想観の基底としているのである。しかしながら、仏工としての自分は、愚かな凡夫であり、衆生であることを痛いほど自覚をしながら、仏様のはかりによって修理をさせていただいているのである。

このような現実と仏想観の接点を求めながら、仏像の修理をさせていただけるのは、誠に有り難いことである。

編集後記

今号から、リニューアルしました圓塾便り。できるだけ一方通行ではなく、ご縁のある皆さんのお声やお姿も感じて頂けるようなお便りにしてみました。

これからも、色々な切り口から圓塾の姿を感じて頂けるような圓塾便りにして参ります！

そこで皆さん、あんなこと、こんなこと：圓塾に参加している、していないとか関係なく、なんでも構いません。皆さんのあるがままのお姿、お声をお寄せ下さい。

どうかよろしくお願い致します。楽しみに、お待ち申し上げております♪
本年もよろしくお願います！

発行人 澤野ともえ

